

按摩

小酒井不木

青空文庫

コホン、コホンと老按摩^{あんま}は彼の肩を揉^もみながら、彼の吸う煙草の煙にむせんで顔をしかめた。少し仰向き加減に、首と右肩との角度を六十度ぐらいにして居るところを見ると、生れつきの盲人^{めくら}であるらしい。

郊外の冬の夜は静^{しずか}である。

「旦那はずいぶん煙草ずきですねえ。三十分たたぬうちに十本あまりも召し上ったようですねえ」

と、彼は狡猾^{ずる}そうな笑いを浮べて言った。

「うむ。俺はニコチン中毒にかかったんで、身体中の肉がこわばってどうにもならぬから、按摩が通るたびに呼びこまずには居^おれんのだ。何とかしてこのニコチン中毒は治らぬものかなあ」と彼は中年のニコチン中毒患者に特有な蒼白い顔をして、でも巻煙草を口から離さずに言った。

「そりや旦那、眼をつぶすに限りますよ」

「ええッ？ 何？」と彼は、わが耳を疑うかのように、暫^{しば}らく巻煙草を口から離して按摩の返答を待った。

「両方の眼をつぶして盲人になるんですよ。眼をつぶせば、あの恐いモルヒネ中毒さえなおるのですもの、ニコチン中毒ぐらいは訳もなくなおると思うのです」

彼は背筋にひやりとするような感じを起した。

「お前はその経験があるとでもいうのか？」とたずねた彼の声は、心もち顫ふるえて居た。

「そうですよ。実は私の眼も、むかしは一人前に見えたんですが、ふとしたことからモルヒネ中毒にかかつて、あげくの果に、眼をつぶすことになりましたが、眼が見えなくなると、不思議にもモルヒネ中毒はけろりとなおりましたよ」

「ふむ、妙な話だなあ。どうしてモルヒネなんか嘔のむ気になったんだい？」と彼は聊いささか好奇心に駆られて、どんよりして居た眼を輝かした。

「さあ、それをきかれると困るんですけれど……」

「いや、話してくれよ」と、彼は吸いさしの煙草を火鉢の灰の中へ突きさした。

按摩はにやり笑った。

「大ぶ乗気になりましたねえ。ええ、もう、白状してもかまわぬ時ですから、思い切つて御話ししましょう。実はねえ旦那、私は若い時に人殺しをしたんです」

彼はぎくりとした。

「ははは、旦那、少し肩の肉がかたくなりましたねえ。なに、そんなにびっくりなさることではありませんよ。今じゃ私もおとなしい人間です。まあ私のいうことをお聞き下さい」

按摩は、それから彼が恋の敵を殺すに至るまでのいきさつを凡そ一時間近くも話した。さすがの彼も、もう煙草どころではなく、段々話が進むにつれ、好奇心が恐怖に変わって、いわば驚につかまった雀が、驚から懺悔話をきいて居るといったような為体であった。

「……とうとう私はある晩、奴を森の中へおびき出しましたよ。いよいよの時になって、私は奴を一步先へあるかせ、うしろから右の頸筋を、短刀でぐさと突きました。人なみはずれて背の高い奴でしたから、突いた拍子に、頸動脈から、私の右の眼にパツと暖かいものがかったかと思うと、焼けるように眼が痛み出したんです。恋敵の血という奴は、実に恐しい力があるものですねえ。私は、奴の死骸も、短刀もすてて、右の眼を押えたまま、一目散に町の方へ走って来たんですが、どうにもこうにも痛くて仕様がなかったので、あんな小さな病院へとびこんだのです。」

院長は眼科医ではなかったですが、私が三百円ばかりはいつて居る財布を投げ出して、

（ほかにまだ五百円ばかり、高飛びするつもりで腹巻の中に持って居ましたが）どうか自分のうち入院させてくれといったら、金に眼が眩くらんだのか、素性もきかずに病室をあてがつて、それから眼を診察してくれましたが、珍しい眼の出血だといって、暫らく洗つてくれたから、幸いに出血はとまりましたよ。ヒヒ、とまるのが当り前です。ところが、血はとまっても痛みがどうしてもとまりません。で院長は、とりあえずモルヒネを一筒注射してくれましたが、モルヒネの力はえらいもので三十分たたぬうちに、痛みはけろりとなおりました。

さて、翌日の晩、奴をやつつけた同じ時刻になると、右の眼が又もやきんずきんと痛み出しました。で、またモルヒネを注射してもらいましたら、痛みはけろりとなおりました。

すると又、その翌日の同じ時刻に、右の眼が前ぜん晩ばんよりも一層はげしく、ずきんずきんといったみ出しました。そこで又モルヒネの注射をして貰いましたが、こんどは一筒ではきかず、二筒で始めて痛みを忘れました。

すると又、その翌日も翌々日も、同じ時刻にだんだんはげしく右の眼が痛み出し、モルヒネ注射の数も段々殖えて行きましたが、とうとう七日目の晩、いや奴の初七日の晩とい

った方がよいかも知れません。右の眼が痛みと共に急に見えなくなつて、つぶれてしまいました。そうしたら、その翌日からは、例の時刻が来ても、右の眼に痛みは起りませんでした。旦那、恋敵の血というやつはよつぽど恐いものですねえ。

こう申すと、旦那は、どうして私が御用にならなかつたかを不審に思いになるでしょう。旦那、兇^{きようじよう}状持ちが、身をかくすに一番よい所は病院ですよ。よく、大泥棒などは、小さな罪を白状して、監獄へ入れてもらい、人殺しの罪をまぬがれるという話ですが、私は、人殺しをしたら、病院へ駆けこむに限ると思うのです。然^{しか}し、大きな病院ではいけません。小さな病院でなくては。又、金をうんと持つて居なくてははいけません。すると、むこうでは金故^{ゆゑ}に、大切にかくまってくれます。警察でもまさか病人が人殺しをすまいと思ひますから、調べにも来ませんよ。なに、入院した日附なんざあこちらの言いなり次第にごまかしてくれます。私は勿^{もちろん}論変名で入院しました。兎^とに角^{かく}、警察へは引張られずにすみ、事件は、それ何とかいいますねえ、そうそう「迷宮入り」ですか、まったく、有^う耶無^や耶にすんでしまいましたよ。

ところがです、法律上の罰は、みごとに免^{まぬか}れましたけれど、恋敵の血の罰が、なおもはげしく、私にせめかかつてまいりました。

右の眼がつぶれて、翌日から痛みは去りましたが、さあこんどは、例の時刻が来ると、モルヒネの注射をして貰わねば、身体中がむしゃむしゃして来て、とてもこらえられないようになったんです。それも普通のモルヒネ中毒とはちがって、モルヒネが身体の中へはいって行くときの痛みが恋しくて恋しくてならぬようになったんです。旦那、旦那は、モルヒネが皮膚の中に沁みこんで行くときの、あの涎よだれの垂れるような、気持のよい痛みを御経験になったことがありますか。あれですよ、あの痛みが恋しくなったんです。で、毎日、例の時刻にモルヒネを注射してもらいましたが、一二週間経つと、腕や背中どこに注射してもらっても、その恋しい痛みを覚えなくなったんです。さあ大変私は身体中のどこが痛いかと、方々捜しまわった結果、でも、唇のまわりや、足の裏を捜しあてて痛みを味つて来ましたが、それも二三日注射が続くと、もう、感じがなくなっていました。

とうとう、しまいには自ら注射器をとって、御無礼な話ですが、恥かしい部分の皮下へ注射したんです。さすがにこの部分の皮膚は痛みが強く、何ともいえぬ愉快を感じましたが、それも然し四五日以上は続きませんでした。

もう痛いところは何処どこにもなくなっていました。旦那、私が、何とかして痛いところを見つけ出そうと焦燥あせった時の心持を御察し下さい。例の時刻が近づいて来ると、私は

気持ちがよいようにもいただきましたが、悶^{もだ}えたあげく、たった一つだけ残って居る、一ばん痛いところを見つけたんです旦那、それを何処だと思います？

眼ですよ。眼ですよ。眼にものはいった時の痛みは旦那もよく御承知でしょう。つぶれた眼には痛みはないですが、あいて居る眼は、私の欲望を思う存分叶^{かな}えてくれるだろうと、私は喜び勇んだものです。

で、その晩、例の時刻に、モルヒネの注射針を左の眼にずぶりと突刺して、徐々に注射しました。さすがに思う存分の痛みを味わうことが出来ましたよ。

旦那、旦那は、黒い^{ほのお}焰というものを想像なさったことがありますか。モルヒネが左の眼に注射されて行くとき、私には何となく黒い焰といった感じがしましたよ。そうして、それきり私の左の眼は見えなくなつてつぶれてしまいました。

ふと、気がついて見ると、旦那、その日をいつだと思ひになります？ 奴が死んだ日から、ちょうど四十九日目でしたよ。

その翌日からは、不思議にも、モルヒネがほしくなくなりました。その代り、私は生れもつかぬ盲人^{めくら}になりました。

ですから旦那、モルヒネ中毒は、眼をつぶせばなおると私は今でも思つて居るのです…

…」

じつと聞いて居た彼は全身にはげしい寒さを感じた。按摩の話し終ると同時に揉み終わったが、彼はもはや巻煙草をふかす勇氣もなく、按摩の顔を見るのが恐しかったので、黙つて紙入の中から一円札を取り出して、按摩の手に握らせた。

老按摩はそれをすなおに受取つて懷にしまい、立ちぎわに、又もや狡猾ずるそうな笑いを浮べて言つた。

「えへへ、旦那、怒つちやいけませんよ。今の話は、ありや、みんな作りごとです。私は生れ乍ながらの盲目めくらですが、どういふものか、煙草の煙が大嫌いでした、旦那を揉んで居る間、どうかして、やめて頂きたいと思つても旦那はとて一通りの手管てくだではおやめにならぬと思つたので、つい少しばかり話が大量にわになりましてよ。へへへへ、ではどうか、御ゆつくりおやすみを……へえ、へえ、俄か盲人めくらとちがいますから、手を引いて下さらなくても大丈夫です……」

青空文庫情報

底本：「怪奇探偵小説名作選」 小酒井不木集 恋愛曲線」ちくま文庫、筑摩書房

2002（平成14）年2月6日第1刷発行

初出：「新青年 増刊号」博文館

1925（大正14）年8月号

入力：川山隆

校正：宮城高志

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

按摩

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>